



中村俊定文庫
文庫 18
699

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written on the left page of an open book. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines, flowing from right to left across the page.



葛原葉

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a diary. The text is written in a fluid, connected style across approximately 10 lines.

一序

Handwritten text in a cursive script, continuing the text from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 10 lines.

そとよふくさむしおのしのみちあり
てふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふ
のふふふふふふふふふふふふふ

坐禪菴主人



葛落葉

坐掃菴也

春の部

門下之徒松や草うゝ一は友物あり
ひまふりの帰やまふと年世の如
蓬萊よと海や浮世の徳うけし
恵才柳嵐うゝゆのうゝうらまをわ
二下出とすゝんふ我郷の雲あり

降雪もあはるきらる名や茶の本畑
芽野ふもふれあふ事ふ久の花
野ふ咲ふ梅も人ひく子日ふか
水もすくもるもふんむらにふ花
東市くや火鉢よりと数並巨燧
齒一取く一鼻もあふも梅の花
梅ふりぬ垣や娘もあふら向
飛せしや情^{カキ}もあ結ひて梅の花

き

矢場もすくしん尻寒く一梅の花
鶯や耳よりふもる乃凍もあぬ
うく比すのせつし志もふ家もあぬ
鶯もあ倒もあぬ流もあふてなし
鶯や名もあ雪もあふら上もあぬ
うくひすやふ斗の樽餅を道は志
武者繪もあふあふらひ梅もあ武
交ふもあふてあふらひ梅もあ

足柄の山くさくさをとおそ嵐の籠
濡ねるも糸の糸ぬきさあり夾のる
初うゆや柳とみどり小豆笑し
くろの午や左年子画るも吉狐
糸糸の穉子門くさく二月糸
うさぎの森の猫や其の煙出
猫の恋屋松とありて椽の下
井戸堀の強きことありぬ猫乃恋

寺町や猫や涅槃名恋も常
足少の湫三本ありふ田うらうね
出智や新焼し隣と針糸の糸
本智法い伴達や其の流の流黄裏
出のくさくさや松の色なる乳母一人
お代や人くさく雲かた二日月
お代やあしから別條字履元
出のくさくさ波井もゆきの水さる

帰るに数くくくはあろ月
 蜂ちん巣や討まよ向ふ類のふら
 目をその門を討ふさうりや土葉
 曲水に猪にも流る榎の難
 春の丹をちりては情や草の解
 巖にふくまきあるとくおをよの難
 横よんお新法あふふの難
 お細工の不取を、難の上、難、難

強盗もとの矢と難乃犬くありこ
 梅をえん目をお代する梅の花
 祖父の目く、おを、巻、り、巾
 糸ちろ下戸で折らせぬ梅、り、乳
 五、糸、よ、の、繩、を、ら、志、る、様、ら、お
 炉塞や泊り人、お、あ、る、そ、お、ら
 茶よ、お、年、の、京、て、人、ら、ぬ、巖、武
 鉄炮の、お、よ、て、お、あ、り、難、子、の、聲

酒を完くこめし人ありは
手折て下よ其のきぬの
葉の曲尺堅よつこひて
折人よ秋は懲たし梨子の
古雛の箱よとれて衣着ぬ
掃溜よ蝶よ舞よ名残よ
水夾や一寸先の木下 園

夏の部

葉よと綿よ別斗や衣之
のちむら石の麦を裸や衣之
おん赤子を介しそのおん生
孫よ寐よ給よおれた郭公
花の幕布枝赤よこれの子規
才川恋よ捨ふお明を子規
遍照もおん知りておんま

以つも初音すしてとら孫の時鳥
 馬士くくも能年あて杜宇
 まとうぬおの切煙孫きう杜鶴
 此花すれよきあてて若菜外
 きく梢とらすきとくく夏木立
 りくくアまのり附くれて初茄子
 梅百時や人く初孫の茄子賣
 とらあめの瓜やとらけの新枕

こに交るぬりのあき夏木柳百菊
 菊や盗人くく繩うけらはく
 竹の子やわくか答る名りくく
 又月すら紺屋は横の幟の旗
 いさひひし姉きすけく幟の
 糝ゆふカや昼寐の字ゆら
 あや欠るく世活あきあや端牛
 口五すくく初道明くくく

小便と多田の思くさる苗取
 田植とありはまゝお鷺のそと向
 踊よりのあらしをぬも田植のれ
 月涼し敷きうそ夏はあつし
 汁は青から吾方怒るんも敷きうそ
 志くらくの真まもあける敷造うれ
 捨る身も冷せぬのそくうりか
 惟光をあららむらせる敷やう武

昼中の下如く敷やりの白ひら籠
 てるまゝおの御製おおは敷きうれ
 危らうも口ゆかしくも一の難
 ほう法とる子供や置と附本うま
 憎い敷とおま——さうりの帯うま
 帯うまもモロひうのてや火とり
 竹あらしあ人雪よ舞う所の帳は
 合歡の花子傳をうりもあうれに

早刈におもむくことへの重報を
刺さる佛へありはくへの花
屋顔やとららの森もるよ舎に
横森く同地荒あり采子多
を加帳ふまふすやへのこと
村てはきくや存屋とまきりし
何やらあ草鞆捨るはくへの非
涼はく喰ふことへ中へ今年作

物中の喜よりのまる暑くや
喰の膳くも能因のあつこと
買ふよまて鉄つやせり心た
舌はくや健くら出る巻鯛
くはるを六月獲る扇あり
うらぬの跡おろすく椽のく
椽よ出く帯くくく涼くを
追めけく大の場をく涼く

糞とわら来く風もは涼も
竹もまこ子ゆよくらー木下園
鳥踏んま来て鳥馬一富士詣
蟬たつや秋の近さも一里塚
鳥う汲水のけ出や清後川

秋の部

秋志はや直寐も桐乃枕すま
ハ

夕ぐれや板をまきて秋の風
ゆかすや萩かとうの風豆腐賣
空ん書くく控られぬ扇の南
若菜とまぬ鼻も秋を抄らうせ
誰の笛の名うて星の一番切
うーやしらひ天の河系北条抄子
羽孫のあゝ橋やすーた天の川
鶴や踏れくく依星に組

萬葉集

星北くろく八日やうき物り家
源平の破ら孫を志れぬ西瓜
朝の日の世うしは餌の沙草のと
朝鳥も古んやうきやうき唯の鐘
葦帯や笠帯のけの朝ふく
般才のくろくぬ空あぐれ之魂系
相經や比の顔の馬を馬邊
送く火やわく火人上別を有

あけ下を嫁ふやうき踊のれ
色は月んさう老とわら若子うき
人磨るいりさうさうさうの月
姥捨や草の親うさうさうさ
雑踏う牛の刀かゝりさうさ
さうさうさう秋や本賊う凡のお
稲つうさうさうさうさうさ
さうさうさうさうさうさうさ

うんをらんを月をき營あつて菌物
 茸物や餅をたると月の連つてに
 背をのりもり度りちまゝ一本の子物
 茸狩や下の子あぬとる真のま物や
 二日月の下のうんむしてまのま物
 庭たうりてや。医ちらありまの月
 葉乃月やまのまのあ。梅 盗
 波よ似るううつ目もまゝ一葉麦葉
 +

ひこよひの草や十日せら葉のうほ
 園カゲ雨カシ綿を入るやうに月
 今葉麦の花ちる里や後のう
 后洗の月草六垣板のあれ小な葉
 掃溜のうまこや葉のうまはうや
 よく草を葉のうまこはうまは
 ほうのうまこはうまこはうまこ
 葉むの父のうまこはうまこは

等々いはいはれししのお、後。
 舞うて持るん食まゝの葉山子歌
 徐々しくお葉山子を捨てる
 埃溜いけの落る下駄のあやうく
 追のけの客方あゝあ。柚味増す
 来ぬものを待てるれは柚を捨てる
 葉山子は客窓あけし葉山子あり
 笑うる山もあやうく麻のこゑ

±

麻追ふやや角うりも情あま
 初てんての舞は追うて花野うれ
 瀧たとく喰ふ物あうて秋乃雪
 那て雪く人雪すくれば勢あれ
 客う来て置ておやめ秋のくれ
 焼くて入るお守もれきこころ
 條に別れとつづくおの奈皆し
 秋や物とあまもも葉山子うり

行秋やふゆの指よ 桐ひと葉
ゆき秋や満ちからまを釣一掃

冬の部

炭もすこころこころに初時る
今幾日ありて若草麦刈初志くれ
川越の越もあられぬ一くれの程
道連の兼利よ酒斗は時る名刺

志々はくや乞食とぬきり松の陰
二三枚繪るんく晴れな時るゆ
初雪や別凍ぬうらな竹の葉と
て川ゆたや酒を待てるの外室ち
霜の竹よ初くる雪は菫の如
初雪や信濃くむる 遠照鏡
雪の北見や若草う汚染るる白智子
踏つけぬ足なき巨健よ雪んく南

夏瘦ヤセの肥コふさされき成なりこのち
居風イカゼられあつて入いりぬきさ
六月の杖ツヱく窓まどをさしむけの程
朝あめしよ三度さんど鼻はなをむきささりぬ
孫まごもねる者もの一ひと把つかくさむしを南
引越ひきこへ船ふね作つく屋やの跡あとれをこの村
伏ふせある居風イカゼる桶かじのさき作つくり
ぬきさの意いはれぬきさくぬき冬ふゆ公こう就しゆ

冬ふゆ公こう就しゆこのらぬ人をすし目めのれ
葛くわ西せい月げつ日にち流りゅう斗とうきく葛くわ麦まい湯とう系けい
隠かく居い家かへ蓋かきくぬきや何なに豚とん汁じゆ
皮かわ足あし袋ふくろへ七しち天てんの巨こほろ燧たいの強つよ
あしはつていさかぬ来きや巨こほろ燧たい
池いけさしむしをぬき登のぼり中なかをさし
水みづ伝でんや使つかひしし倉くらへんせを屋や系けい
雪ゆきを踏ふむ世よ渡わたりこのらり大おほ招まね換かへ

市より入る顔やまけの暮蕭川
 暮麦切の日や一本乃大板山記
 宇と斎や酒屋を去り遠くは
 空^{カン}の垢離^{コリ}や夏の人々雪はす
 。あんとあとの水詠や行路道このれ
 僧も唯茶^チの波あのみさう菊
 燥掃^{ソウ}や喜^キの礎^ソりころに椽の下
 年のあそ紙^{カミ}きて^マ流^ルる沙^サ灘^ナあそ

炎より箸ととあうー茶喰ひ
 藪をえんも招へそとち茶竹うり
 横よりく鐘とこむきを解の音
 菴更に幽あり余をの解の地と
 冬と夾ちちい申うら場乃う然
 寒よなく傾城もあそこの雪
 舞心や笑ふ門へさ遠へ

寬政九年龍會于丁巳仲秋上浣日

金雞菴藏

東都書林弘元

日本橋室町貳丁目西側

須原屋市兵衛

